

ミュージカル『キャッツ』における キャラクター表現の比較

21540120 森田彩

目次

はじめに	2
第1章 ミュージカル『キャッツ』について	4
1-1 原作者エリオットについて	4
1-2 『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』について	4
1-3 アンドリュー・ロイド＝ウェバーによるミュージカル化	8
1-4 ミュージカル『キャッツ』の内容	9
第2章 劇団四季とミュージカル『キャッツ』の関係	14
2-1 創設初期の劇団四季について	14
2-2 劇団の転機になった『キャッツ』	14
2-3 劇団四季版『キャッツ』の内容	17
第3章 劇団四季版『キャッツ』を比較する	20
3-1 『キャッツ』劇団四季版と本国版の比較	20
3-1-1 言語と振付の差異	20
3-1-2 ビジュアルの差異	22
3-2 劇団四季版『キャッツ』今昔の比較	29
おわりに	37
参考文献	38
邦語文献	38
外国語文献	38
インターネット文献	39
映像資料	40
図版	40

はじめに

海外ミュージカルは、ニューヨークのブロードウェイ、ロンドンのウエストエンドを発信地として、この日本をはじめとする世界各国に輸出されてきた。前者で誕生したミュージカルには『ウエスト・サイド・ストーリー』や『コーラスライン』に加え、『ライオンキング』などディズニーミュージカルが挙げられる。後者で発祥したものには『ジーザス・クライスト＝スーパースター』や『エビータ』などが名を連ねる中、その代表といえる作品こそが『キャッツ』である。1981年、約40年前に出版されたトマス・スターンズ・エリオット（以下“エリオット”）の『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』、原題 *Old Possum's Book of Practical Cats* に、作曲家アンドリュー・ロイド＝ウェバー（以下“ロイド＝ウェバー”）の手によってメロディーと物語がつけられ、ミュージカル『キャッツ』はイギリス・ロンドンの地で誕生した。個性的な猫1匹1匹について書かれた脈絡のない詩の数々を、ロイド＝ウェバーは1つの物語にまとめ上げ、人間が誰1人登場しないミュージカルは大ヒットを博することとなった。

2年後の1983年、当時創立30周年を迎えた劇団四季によって、『キャッツ』はロンドンから日本に渡ることとなった。同年11月11日に初演された日本版公演（以下“劇団四季版”）はこれ以降、今日まで各地で再演を繰り返される程の長い歴史を辿ることとなる。

『キャッツ』は本拠地であるロンドンや、1982年に初演されたニューヨークでも記録的な上演回数を誇るなど世界的にも成功をおさめたが、劇団四季による『キャッツ』も、日本の演劇界にいくつもの記録を残している。その日本初演時にあたっては、劇団四季の創設者であり演出家でもある浅利慶太が、当時の演劇界にあったあらゆる制度を転換させ、大きな変革をもたらしたことで知られる。従来の日本での演劇興行は長くても3ヶ月であったが、浅利は新宿駅西口にテント型の専用劇場を建設した上でロングランに挑み、見事1年間の公演を成し遂げた。またチケット販売システムにもメスを入れ、チケット販売会社「ぴあ」と協力して電話販売と連動したコンピュータ販売システムを開発・導入した。このように『キャッツ』の初演は前例をことごとく覆し、劇団四季のみならず演劇界にとっても大きな転機となったのである。

作品の内容を改めて見ていくと、『キャッツ』の物語は、猫たちが集うゴミ捨て場から始まる。人間に飼い馴らされずに生きるジェリクルキャッツたちの中で、天上に昇り新しい命を得るただ一匹を選ぶため、年に一度舞踏会が開かれる。猫たちは各々の生き様を歌い踊り、我々観客は夜を徹した舞踏会を目撃するのである。個性豊かな27匹の猫たち

に、劇中で活躍しない者は1匹もいないのである。

筆者は2019年より大井町での公演から本作を繰り返し鑑賞するようになり、エリオットによる原作も含めて、猫たちの心情や内容全体を考察したり、『キャッツ』そのものに強く関心を持つようになった。そこで作品自体の歴史を調べるうちに、登場する猫のビジュアルやナンバーに大規模なリニューアルが加えられた事実を耳にした。本拠地・イギリスの公演（以下“本国版”）にも目を向けると、劇団四季版には登場しない猫、あるいは登場しているものの名前とビジュアルを入れ替えたような猫の存在も目の当たりにした。これを受け、本国版からの改変と大規模リニューアルから、劇団四季版『キャッツ』における猫たちのキャラクター表現の特徴を導き出せるのではないかと、筆者は興味を抱いた。

本稿では現在の劇団四季版『キャッツ』が如何にして成立したかを、本国版公演、加えて過去公演との比較と共に考察していく。第1章では『キャッツ』の原作である『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』を、作者のエリオットの生い立ちと共に紹介する。同時にそれをミュージカル化するまでの過程、その内容を、作曲家ロイド＝ウェバーの生い立ちと共に綴り、改めて本作の内容を見ていく。第2章では、劇団四季の歴史において『キャッツ』の初演はどのような存在であったかを、劇団創立初期の沿革とともに振り返っていく。第3章では劇団四季版『キャッツ』を前章で紹介した本国版と比較し、日本初演の際他の演出と共に、猫たちのキャラクター表現でどのような改変がなされたかを洗いだしていく。そして、劇団四季版で行われた演出変更について今昔での比較も行い、劇団四季版『キャッツ』におけるキャラクター表現をこの2例から分析していく。

第1章 ミュージカル『キャッツ』について

1-1 原作者エリオットについて

エリオットは1888年に、アメリカのミズーリ州セントルイスで誕生した。1906年にはハーバード大学へ入学し、その後同大学院やパリなどでの留学を経て、イギリスのオックスフォード大学で文学や哲学を学んだ。1915年には本格的にイギリスへ渡り、オックスフォード大学で学んでいた頃に出会ったヴィヴィアンと結婚した。しかし、ヴィヴィアンは病弱で精神的にも不安定な状態であったため、その治療費を工面するのに苦労する暮らしが続いた。1917年にロイズ銀行に就職すると収入が安定したのを機に、同年に初めての詩集『ブルーロックとその他の観察』、原題 *Prufrock and Other Observations* を発表するなど、創作活動も本格化し始める。だがヴィヴィアンの病状は安定するどころか悪化の一途を辿り、彼女の世話をしていたエリオット自身もその影響を受け、療養するよう指示される。それでもしばらくはヴィヴィアンと過ごしたのちスイスで療養し、1922年に完成したのがエリオットの代表作である「荒地」、原題 *The Waste Land* であった。第一次世界大戦後の世界を綴ったこの長詩はリズムの編成も新しく、当時の韻文学の常識を打ち破るものであった。

1927年にはイギリスに帰化し、1932年には古巣であるハーバード大学の招聘で再びアメリカに渡り、それと同時にヴィヴィアンと別居し、離婚に至る。そしてイギリスに帰国後の1939年、児童向けの詩集『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』を出版する。本作の内容は次節で述べていく。

その後多数の著作を発表し、1947年にはノーベル文学賞授賞、1952年にはロンドン図書館長に就任するなど、長年の文学活動が称えられた。私生活では1947年にヴィヴィアンを亡くすも、10年後の1957年に新たな妻ヴァレリーを迎え、1965年にエリオットが76歳で死去するまで共に過ごした¹。

1-2 『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』について

『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』は、エリオットが猫をテーマにしたナンセンス詩を集めて、フェイバー・アンド・フェイバー社より刊行された詩集である。「ポッサム²おじ

¹ エリオットの生涯は、曾我雅俊「キャッツと T. S. Eliot」（曾我、2015）を参考。

² これはねずみに似た動物「オポッサム」に由来し、エリオットにとって先輩にあたる詩人エズラ・パウンドにつけられた「ポッサム」というニックネームを、エリオットがその

さん」とは本作の語り手であり、作者であるエリオット本人のことも指している。

本作はその題通り、語り手の「ポッサムおじさん」が、個性豊かな猫たちとの関わり方を読み手に伝えていく内容となっている。以下にその目次を記していく。原題はエリオットが1939年に出版した原版（Eliot, 1939: 9）、括弧内に記した日本語訳の題は池田雅之（1995: 4-5）の和訳版によるものである。

The Naming of Cats（猫に名前をつけること）

The Old Gumbie Cat（おばさん猫ガンビー・キャット）

Growltiger's Last Stand（親分猫グロウルタイガー 最後の戦い）

The Rum Tum Tugger（あまのじゃく猫ラム・タム・タガー）

The Song of the Jellicles（おちゃめなジェリクル猫たちの歌）

Mungojerrie and Rumpelteazer（泥棒コンビ猫マンゴジェリーとランペルティージャー）

Old Deuteronomy（長老猫デュートロノミー）

The Pokes and the Pollicles（ペキニーズ一家とポリクル一家の仁義なき戦い）

Mr. Mistoffelees（猫の魔術師ミストフェリーズ）

Macavity: the Mystery Cat（猫の犯罪王マキャヴィティ）

Gus: the Theatre Cat（劇場猫ガス）

Bustopher Jones: the Cat about Town（ダンディ猫バストファー・ジョーンズ）

Skimbleshanks: the Railway Cat（鉄道猫スキンプルシャンクス）

The Ad-dressing of Cats（猫に話しかける法）

Cat Morgan Introduces Himself（門番猫モーガン氏の自己紹介）

それぞれの内容について説明すると、初めに、猫には普通のもの、より威厳のあるもの、そして周りに決して打ち明けないものの順に3つの名をもつという導入がある。続いて、ねずみやゴキブリにお節介を焼く、おばさん猫のガンビー・キャット³ことジェニイエニイド

まま用いていた（池田、2009: 47-48）。

³ ガム（gum）のように一日中動かないでいることが名前の由来になった（池田、1995: 19）。

ッツ⁴が登場する。次に大悪党の海賊猫のグロウルタイガー⁵が、グリドルボーン⁶という雌猫に夢中になり、その隙に天敵のシャム猫軍団に打ち負かされる様子が描かれている。そして天邪鬼なラム・タム・タガー⁷についての詩が続くが、次にジェリクル⁸猫たちという猫の群れについての詩が突然挿入される。それから再び、個々の猫を紹介する詩として、小泥棒稼業をして暮らしているマンゴジェリー⁹とランペルティーザー¹⁰が描かれ、次に長老猫のデュートロノミー¹¹が登場する。続いて、ペキニーズとポリクルドッグにパグやポメラニアンも加わった犬たちの抗争をも圧倒するランパスキャット¹²の様子が描かれる。そして魔術を操る猫ミストフェリーズ¹³、謎に満ちた犯罪猫マキャヴィティ¹⁴、かつて大俳優だったという老いた猫アスパラガス¹⁵、富裕層の粹な猫バストファー・ジョーンズ¹⁶、夜行列車

⁴ 後述の劇団四季版では「ジェニエニドッツ」。人名のジェニー (Jenny) に「いくらでも」を意味する「エニー (any)」、「点」を意味する「ドッツ (dots)」を組み合わせたのが名前の由来になった (池田、1995: 19)。

⁵ 後述の劇団四季版では「グロールタイガー」。「グロウル (growl)」は「うなる」を指す (池田、1995: 22)。

⁶ 「グリドル (griddle)」は「焼く」、「ボーン (bone)」は「骨」がそれぞれの由来になっている (池田、1995: 26)。

⁷ ラム (rum) は「不思議な」「奇妙な」の意、タム (tum) は楽器の擬音、タガー (tugger) は「物事をぐいぐい引っ張っていく人」の意と「タイガー (tiger)」のもじりがそれぞれ由来となっている (池田、1995: 34)。

⁸ 「ジェリクル (jellicle)」のスペリングにおける由来は、「ジェリー (jelly)」は「柔らかくて、プリプリした」を指し、「クル (cle)」は「小さなもの」を意味する接尾辞であり、ラテン語の “clue” の異形である (池田、1995: 40)。語源自体は、エリオットの幼い姪が猫をあやしているときに「ジエア・リトル・キャット (dear little cat)」と発音しようとして「ジェリクルキャット」と言ったことに由来する (関口、2020: online)。

⁹ 「マンゴ (mungo)」はスコットランドに多い男性名で、「絨屑」「再生羊毛」のことも指す。「ジェリー (jerrie, jerry)」は「片手間に仕事をする人」を指す (池田、2015: 193)。

¹⁰ 後述の劇団四季版では「ランペルティーザ」。「ランペル (rumple)」は「しわ」「ひだ」、「ティーザー (teaser)」は「弱い者いじめをする者」をそれぞれ指す。グリム童話「ルンペルシュティルツキン」をもじったとも考えられる (池田、2015: 193)。

¹¹ 後述の劇団四季版では「オールデュートロノミー」で、発音は「オールデュートロノミー」となる。「デュートロノミー (Deuteronomy)」は『旧約聖書』の「申命記」を指す (池田、1995: 55)。

¹² 「ランパス (rumpus)」は「大騒ぎ」「言い争い」を指す (池田、1995: 65)。

¹³ 「ミスト (mist)」は「霧」を指し、名前全体はゲーテの『ファウスト』に登場する「メフィストフェレス (Mephistopheles)」をもじっている (池田、1995: 74)。

¹⁴ イタリアの政治家マキャヴェリ (Machiavelli) と、コナン・ドイル作『シャーロック・ホームズ最後の事件』に登場するモリアーティ (Moriarty) の名前をかけたものが由来とされる (池田、1995: 82)。

¹⁵ 野菜のアスパラガスから由来しているとされる (池田、2015: 199)。

¹⁶ 後述の劇団四季版では、中黒は除かれる。「クリストファー (Christopher)」という聖人の名に、「厚い胸板を張る」という意で「バスト (bust)」を組み合わせたのが名前の由来

を仕切る働き者の猫スキンプルシャンクス¹⁷と紹介が続く。その後、これまでの流れをまとめるかのように、猫には敬意をもって接するべきなどといった関わり方について述べる詩が登場する。しかし最後には、初めに登場してもおかしくないような、モーガンという門番の位置にある猫の紹介が突如挿入されている。

このように、すべての詩に猫という共通したテーマがあり、前述の通り「ボッサムおじさん」による猫の扱いを記した作品とまとめることができるものの、収録されているその順に脈絡はなく、各々の詩を独立した作品と捉えることもできる。

この原作に登場する猫には、先述の説明で挙げた者以外にも“The Naming of Cats”で、Peter (ピーター) , Augustus (オーガスタス) , Alonzo (アロンゾ) , James (ジェームズ) , Victor (ヴィクター) , Jonathan (ジョナサン) , George (ジョージ) , Bill Bailey (ビル・ベイリー) , Plato (プラト) , Admetus (アドメートス) , Electra (エレクトラ) , Demeter (ディメーター)¹⁸ , Munkustrap (マンカストラップ)¹⁹ , Quaxo (クワックソウ) , Coricopat (コリコパット)²⁰ , Bombalurina (ボンバルリーナ)²¹ , Jellylorum (ジェリローラム)²²が挙げられている。さらに“Growltiger's Last Stand”では、グロウルタイガーの手下として Grumbuskin (グランブスキ) ²³ , Tumblebrutus (タンブルブルータス)²⁴、シャムネコ軍団の大將として Gilbert

である(池田、2015: 194)。

¹⁷ 正式な名前の由来は不明。一説として、「ナンセンスな」を指す古語の“skimble-scamble”、エリオットと同世代の詩人・批評家として実在する「シャンクス (Shanks)」を合わせたと考えられる(劇団四季、2021: 67)。

¹⁸ 後述の劇団四季版では「ディミータ」。ギリシア神話において、大地の生産を司る同名の女神から由来する(劇団四季、2021: 73)。

¹⁹ 正式な名前の由来は不明。マンチェスターやランカスターなどの地名が関連するか、「私たち(us)をわな(trap)にかけようとしている」という語源があるとも考えられる(池田、2015: 203)。

²⁰ 「コリコ(corico)」は「闘牛」を指す「コリーダ(corrida)」から由来したと考えられ、「パット(pat)」は「軽い足取り」を指している(池田、2015: 234)。

²¹ 「ボン(bomb)」は「爆弾」を指し、そこへ「バレリーナ(ballerina)」を組み合わせて名づけられたと考えられる(劇団四季、2021: 73)。

²² 後述の劇団四季版では「ジェリーローラム」。「ジェリー(jelly)」はお菓子のゼリー、俗語で「可愛子ちゃん」を指し、「ラム(rum)」はラム酒を意味する(池田、2015: 208)。

²³ 「ブツブツ言う」「うなる」を指す「グランブル(grumble)」と、「詐欺師」を指す「スキん(skin)」を組み合わせて名づけたと考えられる(池田、1995: 24)。

²⁴ 「タンブル(tumble)」は「倒れる」「没落する」を指し、「ブルータス(brutus)」はローマの政治家ブルータスと、「残酷な」を意味する「ブルータル(brutal)」をかけている(池田、1995: 24-26)。

(ギルバート)²⁵が登場している。

1-3 アンドリュー・ロイド＝ウェバーによるミュージカル化

ロイド＝ウェバーは 1948 年にロンドンで生まれ、20 代前半であった 1971 年には『ジーザス・クライスト＝スーパースター』²⁶、その後 1976 年には『エビータ』²⁷を制作するなど、ミュージカルで多くの成功を収めていた作曲家であった。そんなロイド＝ウェバーが幼い頃に触れていた作品こそが、エリオットの『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』であった。時を経て作曲家となったロイド＝ウェバーは、女優であるジェニー・リンデン²⁸による詩をピアノ伴奏に合わせて朗読する企画に際し、作曲を依頼されたことで、幼少期に慣れ親しんだ本作に目をつけた。当初は一部の作品のみに曲をつけることを検討していたが、歌に踊りをつける形を考え、1980 年にミュージカル・プロデューサーのキャメロン・マッキントッシュ²⁹との話し合いによって、ミュージカル化へ動き出すこととなった。

エリオットの死後著作権を保有していた未亡人のヴァレリーは、引用の許諾を求められた際、エリオットが生前ウォルト・ディズニーから提示された『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』を映画化したいというオファーを断っていたことを明かし、初めこそは難色を示した。しかし、後日ロイド＝ウェバーに招かれ構想段階のメロディーを聴かされたことでヴァレリーも理解を示し、エリオットが生前発表しなかった詩の原稿をロイド＝ウェバーに見せた。その中にあった“Grizabella: The Glamour Cat”（娼婦猫グリザベラ³⁰）は、当時エリオットが執筆はしたものの、子供向けに制作していた『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』には相応しくないと判断したという経緯があった。さらに、エリオットから出版社のフェイ

²⁵ ギルバート。名前は、北米にイギリスで初めて植民地を開拓したハンフリー・ギルバート (Humphrey Gilbert) から由来しているとされる (池田、2015: 202)。

²⁶ 1973 年に劇団四季で『イエス・キリスト＝スーパースター』として日本初演され、その後『ジーザス・クライスト＝スーパースター』として上演されている。イエス・キリスト最期の 7 日間が描かれている。

²⁷ 日本では 1982 年に劇団四季によって初演された。アルゼンチン大統領夫人として国民から絶大な人気を誇ったエバ・ペロンの生涯が描かれている。

²⁸ イギリスの女優 (1939-)。

²⁹ イギリスのミュージカル・プロデューサー (1946-)。『レ・ミゼラブル』や『オペラ座の怪人』に携わった。

³⁰ 名前の由来として、「灰色の」「嘆く」「悲しむ」を指す「グリズル (grizzle)」と、「美しい」を意味する「ベラ (bella)」という女性の人名につけられる語の組み合わせが考えられる (劇団四季、2021: 66)。そのモデルは、エリオットの前妻であるヴィヴィアンとされる (池田、2015: 229-230)。

バー・アンド・フェイバーへ書いた手紙には、作中に登場したポリクルドッグとジェリクルキャットが気球に乗って天上 (heavyside layer) へ昇るという構想が詩と共に綴られていたという。

後日、舞台監督のトレヴァー・ナン³¹が制作に参加した上で、ロイド＝ウェバーらはヴァレリーから最終的な許可を得た。その後、『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』のみでは物語として成立しない部分を、エリオットによる未発表の作品などによって補完するという変則的な手順で、かつエリオットの作品性を尊重しつつ、ロイド＝ウェバーはミュージカル『キャッツ』を作りあげた³²。このようにして1981年、ロンドンのウエストエンドで世界初演を果たした『キャッツ』は、後述の日本を含めて世界各国で上演された。ニューヨークのブロードウェイでは1982年から2000年まで上演され³³、18年間というロングラン記録を残した(安倍、2000: 74)。

1-4 ミュージカル『キャッツ』の内容

ミュージカル『キャッツ』の大まかな筋としては、まず年に一度、満月が輝く夜に、ジェリクルキャッツは都会のごみ捨て場に集まり舞踏会を開く。その舞踏会では、長老猫オールドデュトロノミーが、天上に昇り再生を許されるただ一匹の純粋な猫を選ぶというものである。原作では「ポッサムおじさん」の目線で猫たちが紹介されていくが、ミュージカルではジェリクルキャッツ自身が自らの習性を観客たる人間に説いていく構造となっている。また、この物語を軸として主に原作で取り上げられた猫たちが各々のミュージカルナンバーによって生き様を語るような構成にもなっている。しかし要所要所で、年老いた娼婦猫であり他の猫たちからは蔑まれているグリザベラの存在が語られ、最終的にはグリザベラが天上に昇る一匹に選ばれ救済される結末となっている。これに加えて、後半部分では犯罪王のマキャヴィティによって長老のオールドデュトロノミーが拉致され、その窮地を魔術師のミストフェリーズが解決する、という見せ場も設けられている。

この筋をもとにつけられたミュージカルナンバーを以下に示す。なお、括弧内には原作となったエリオットの作品を示している。

³¹ イギリスの舞台監督(1940-)。『キャッツ』に携わった当時は、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーで芸術監督を務めていた。

³² ミュージカル化までの経緯は、新井潤美「エリオット『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』とミュージカル『キャッツ』」(新井、2021: 147-172)を参考。

³³ この後、2016年より現在まで再度上演されている。

《ACT 1》

Overture

Prologue: Jellicle Songs for Jellicle Cats

The Naming of Cats (The Naming of Cats／猫に名前をつけること)

The Invitation to the Jellicle Ball (The Song of the Jellicles／おちゃめなジェリクル猫たちの歌)

The Old Gumbie Cat (The Old Gumbie Cat／おばさん猫ガンビー・キャット)

The Rum Tum Tugger (The Rum Tum Tugger／あまのじゃく猫ラム・タム・タガー)

Grizabella: The Glamour Cat (Grizabella: The Glamour Cat／娼婦猫グリザベラ)

Bustopher Jones: The Cat About Town (Bustopher Jones: the Cat about Town／ダンディ猫バスター・ジョーンズ)

Mungojerrie and Rumpleteazer (Mungojerrie and Rumpelteazer／泥棒コンビ猫マンゴジェリーとランペルティエザー)

Old Deuteronomy (Old Deuteronomy／長老猫デュートロノミー)

The Awefull Battle of the Pekes and the Pollicles (The Pekes and the Pollicles／ペキニーザー家とポリクルー家の仁義なき戦い)

The Jellicle Ball (The Song of the Jellicles／おちゃめなジェリクル猫たちの歌)

Grizabella: The Glamour Cat (Reprise) (Grizabella: The Glamour Cat／娼婦猫グリザベラ)

Memory (Prelude) (Rhapsody on a Windy Night／風の夜の狂詩曲)

《ACT 2》

The Moments of Happiness (The Dry Salvages／ドライ・サルベージ³⁴)

Gus: The Theatre Cat (Gus: the Theatre Cat／劇場猫ガス)

Growltiger's Last Stand (including "The Ballad of Billy M'Caw" or "In Una Tepida Notte")

(Growltiger's Last Stand／親分猫グロウルタイガー 最後の戦い)

Skimbleshanks: The Railway Cat (Skimbleshanks: the Railway Cat／鉄道猫スキンプルシャンクス)

³⁴ 詩集 *Four Quartets* 原題『四つの四重奏』より。

Macavity: The Mystery Cat (Macavity: the Mystery Cat／猫の犯罪王マキャヴィティ)

Mr. Mistoffelees (Mr. Mistoffelees／猫の魔術師ミストフェリーズ)

Memory (Rhapsody on a Windy Night／風の夜の狂詩曲)

The Journey to the Heaviside Layer (エリオットがフェイバー・アンド・フェイバー社に宛てた手紙より)

The Ad-Dressing of Cats (The Ad-dressing of Cats／猫に話しかける法)

物語とナンバーを改めて検討すると、本作で選ばれる一匹に施される「再生」とは救済を意味するものであり、二幕冒頭の“The Moments of Happiness”では猫を含む生きとし生けるものにとっての幸福という哲学的かつ宗教性のあるメッセージが込められている。エリオットの作品にはこうした哲学や宗教のモチーフが多々登場するが、原作には登場せず、ある種の人間味を備えたグリザベラという異質な存在は、それらのモチーフを担っているといえる。そのグリザベラが救われるという展開も含め、「ミュージカルの劇化（ドラマタイゼーション）」（池田、2015: 89）に繋がったと考えられる。

劇中で登場する猫は各国の公演毎に異なるものの、1981年の世界初演当時では以下のようになっていた³⁵。なお、斜線を用いて示しているものは、一人二役もしくは三役で演じているものである。

Alonzo／Rumpuscat／Tumblebrutus

Asparagus／Growltiger

Bombalurina

Bustopher Jones／Old Deuteronomy

Carbuckety³⁶

Cassandra³⁷

Coricopat／Gilbert

Demeter

³⁵ Lloyd Webber, Andrew, 1981, *Cats: the book of the musical* (Lloyd Webber, 1981: 2) を参照。

³⁶ カーバケットティ。「車」の「カー (car)」と、「後ろ」の「バック (back)」を組み合わせで「車の尾灯」という意味を持たせたと考えられる（池田、2015: 215）。

³⁷ カッサンドラ。ギリシア神話では女予言者を指す（池田、2015: 209）。

George
Griddlebone／Jellylorum
Grizabella
Grumbuskin／Munkustrap
Jemima³⁸
Jennyanydots
Macavity／Mungojerrie
Mistoffelees／Quaxo
Rumpelteazer
Rum Tum Tugger
Skimbleshanks
Tantomile³⁹
Victoria⁴⁰
The Kittens, The Cats Chorus（アンサンブル）

この一覧によると、具体的な役名のある猫は 30 匹、それらを演じる出演者は 21 人、アンサンブルも合わせた場合総勢 28 人ということになる。このうち、原作で一つ一つの詩として取り上げられていない猫たちに関しては、主に次のようなキャラクターがつけられている。マンカストラップ（Munkustrap）はリーダー猫であり、本作において狂言まわしの役割も務める。ボンバルリーナ（Bombalurina）とディミータ（Demeter）は、ジェニエニドッツ（Jennyanydots）、グリザベラ（Grizabella）、マキャヴィティ（Macavity）のナンバーでメインのパートを歌い、同じく狂言まわしの役割をもつ。ジェミマ（Jemima）は若い雌猫で、汚れを知らないという特徴からグリザベラに手を差し伸べるという役割をもつ。またヴィクトリア（Victoria）は白猫で、その神秘的な容姿から作中のダンスシーンにおいて目立つ役割を担うことが多い。

³⁸ ジェミマ。ユダヤ人の女性名に多いとされる（池田、2015: 211）。

³⁹ タントミール。名前の由来は複数考えられ、発音では「じれったい」を意味する「タンタライジング（tantalizing）」、「パントマイム（pantomime）」を彷彿とさせる。「非常に」「多くの」を意味する「タント（tanto）」と、距離を示す「マイル（mile）」を組み合わせたと考えられる（池田、2015: 212）。

⁴⁰ ヴィクトリア。名前の由来は、エリオットが自身の作品で頻繁に登場していた時代を治めていたヴィクトリア女王とされる（池田、2015: 201）。

さらに、一人複数役を演じる者のうち、アスパラガス (Asparagus) は役者猫であることからグロールタイガー (Growltiger) を「演じる」形をとっている。ジェリーロラム (Jellylorum) はアスパラガスのナンバーで語り部のような役割を務め、グロールタイガーの場面ではグリドルボーン (Griddlebone) を演じている。そしてミストフェリーズ (Mistoffelees) とクワックスウ (Quaxo) は、作中で実質的な同一人物として描かれている。

第2章 劇団四季とミュージカル『キャッツ』の関係

2-1 創設初期の劇団四季について

劇団四季は1953年、当時慶応義塾大学の学生であった浅利慶太を筆頭に、同大学と東京大学の学生10人によって結成された。創立当初に上演していた作品はミュージカルではなく、台詞のみで展開されるストレートプレイが主であった。その原作はジャン・アヌイやジャン・ジロドゥらによるフランス文学作品が多かった。劇団四季が創設された当時、周囲には西欧流の近代演劇を目指した新劇を上演する劇団が多かった。湯川裕光名義で劇団四季のミュージカル作品の脚本に携わった経験をもつ松崎哲久は、当時の新劇に対するイメージを「観客に分かろうが分かるまいがお構いなしに、役者も演出家も自己陶醉している」と述べている（松崎2002: 9）。浅利の父、鶴雄は新劇を専門とした劇場・築地小劇場創立に携わったということもあり、当時の新劇文化に大きく関わった人物であった。しかし浅利は父達が作り上げた先の新劇に対し、「尊敬と共に空虚さと不毛、つまり危機にさらされた演劇の姿」と批判した（梅津[1955]2020: 75）。このように、当時の新劇は分からなくて当たり前であるという演出上の特徴があった中で、浅利は分かるものであるように努めて演出し、劇団四季で上演していた。この分かりやすい演出が、今後の浅利による演出においても大きな要となっていく。

芸術性を重視したストレートプレイを上演してきた劇団四季であったが、そのみで俳優が生活していくには難しく、浅利はミュージカルにも進出するようになる。浅利は、自身が日生劇場の営業取締役を務めていた1964年から、子ども向けのミュージカルシリーズである日生名作劇場で『はだかの王様』などを上演するようになった。1972年にはブロードウェイミュージカル『アプローズ』を、宝塚歌劇団出身の越路吹雪を主演として上演し、主演以外の配役は国内初のオーディションを開催して決定した。本作を機に1974年に『ウェストサイド物語』、1979年に『コーラスライン』など、ブロードウェイ作品を次々上演し、ミュージカルへの展開が着々と進められていった。

2-2 劇団の転機になった『キャッツ』

ブロードウェイ作品の展開が続く中で転機となったのが、劇団創立30周年記念として上演した『キャッツ』である。この作品の上演は劇団四季のみならず演劇界にも革命をもたらした。

初めに、浅利慶太が『キャッツ』に触れ、日本に持ち込んだ経緯をまとめる。元々読書を

好んだ浅利は慶応高校在学時、エリオットの詩に没頭していた。劇団四季を立ち上げた際も、浅利はその劇団の名前をエリオットの代表作にちなんで「荒地」としようとしていた。しかし、浅利の恩師である加藤道夫は浅利たちの将来を案じて、季節ごとに異なる芝居を見せるという意味合いから「四季」という名前を提案したという経緯がある。それから 30 年以上が経った 1981 年に舞い込んだ『キャッツ』初演の報は、浅利の興味を強く引いた。当時の状況を浅利は以下のように述懐している。

当時「あの T・S・エリオットの詩がミュージカルになったのか」と、すごく驚きました。（中略）当時、日本の演劇は、数ヵ月ごとに演目を変えていくような興行スタイルでした。それでは俳優は経済的に安定しないし、演劇も地域に根づかない。それを解消するためにも、アメリカやイギリスのようにロングラン公演を実現したいと考えていました。そんなとき『キャッツ』と運命的に出会いました。「これはいい」と思いました。なぜかといえば、日本人は猫が好きでしょう。（中略）演劇に触れたことはないが猫は好きという方々もターゲットにできると考えたのです（笑）。（井上、米沢、2014: 77)

前節にて浅利がミュージカルの分野に進出した経緯でも触れたように、浅利は劇団員に演劇だけで生活していけることを、ひとつの運営における目標として掲げていた。さらに演劇を都市部のみならず国内全体にとって親しみのあるものにすべく、決定的な興行の開催を検討していたのが 1981 年当時であった。そのタイミングに、以前から慣れ親しんでいたエリオットの詩が舞台化されたこと、それも猫という日本人にとって親近感のあるモチーフが登場する作品であったという好条件が合致したことにより、浅利は運命的に本作へ惹きつけられたのである。

本作の上演にあたって浅利は、当時日本での演劇興行の形態にあった課題と向き合うことになった。初めに、従来の日本での演劇は長くても 3 ヶ月の期間を確保して公演が行われていたが、浅利はキャッツの上演にあたって新宿駅西口にある 1 等地を 1 年間借りることに成功し、その地にテント型劇場を建設した上でロングラン公演に臨んだ。また、演劇のチケット販売は基本的にプレイガイドか窓口で行われていたが、観客がチケット購入時に様々なプレイガイドにたらい回しにされるというケースが発生することも少なくなかった。そこで浅利は、チケット販売会社「ぴあ」と協力して電話販売と連動したコンピュータ販売

システムを開発し、販売側・購入側にとってもチケット販売の手間を格段に減少させた。このような上演にあたっての準備をしていくうちに、予算は8億円を超えていた。莫大な予算に対抗するために浅利が目をつけたのは、広告宣伝であった。浅利は慶應義塾大学の先輩であった石田達郎の協力を得て、当時石田が社長を務めていたフジテレビが共同主催、そしてスポンサーを味の素が務めることになり、1日10本のCMを打ち出した。このような興行形態の課題を開くための苦労は実り、1年間のロングラン公演は実現し、大好評を博した。その後も表1で示すように、2024年現在までに日本全国の主要都市を巡演するまでに

公演期間	公演都市	公演劇場 ⁴¹
1983年11月11日～1984年11月10日	東京	キャッツ・シアター
1985年3月20日～1986年4月30日	大阪	キャッツ・シアター
1986年10月10日～1987年5月31日	東京	キャッツ・シアター
1988年11月23日～1989年11月23日	名古屋	キャッツ・シアター
1990年4月20日～11月19日	福岡	キャッツ・シアター
1991年5月21日～1992年4月26日	札幌	キャッツ・シアター
1992年7月18日～1993年9月23日	大阪	キャッツ・シアター
1995年1月4日～1996年12月14日	東京	キャッツ・シアター
1997年4月8日～1998年3月8日	札幌	JR キャッツ・シアター
1998年7月1日～1999年5月9日	福岡	福岡シティ劇場 ⁴²
1999年7月20日～2001年1月28日	名古屋	新名古屋ミュージカル劇場
2001年3月11日～2003年1月13日	大阪	大阪 MBS 劇場
2003年4月29日～7月9日	静岡	静岡市民文化会館
2003年8月2日～11月24日	広島	広島郵便貯金ホール
2003年12月19日～2004年5月5日	仙台	宮城県民会館
2004年11月11日～2009年5月3日	東京	キャッツ・シアター
2009年11月11日～2012年11月11日	横浜	キャノン・キャッツ・シアター

⁴¹ 「キャッツ・シアター」を冠するものは、すべて仮設劇場である。

⁴² 現在のキャナルシティ劇場である。

2012 年 12 月 9 日～2013 年 3 月 24 日	広島	上野学園ホール
2013 年 4 月 23 日～8 月 20 日	仙台	東京エレクトロンホール宮城
2013 年 9 月 15 日～12 月 1 日	静岡	静岡市民文化会館大ホール
2014 年 4 月 20 日～10 月 4 日	福岡	キャナルシティ劇場
2015 年 1 月 18 日～2016 年 3 月 21 日	札幌	北海道四季劇場
2016 年 7 月 16 日～2018 年 5 月 6 日	大阪	大阪四季劇場
2018 年 8 月 11 日～2021 年 6 月 20 日	東京	キャッツ・シアター
2021 年 7 月 27 日～2022 年 4 月 17 日	福岡	キャナルシティ劇場
2022 年 7 月 18 日～2024 年 5 月 12 日	名古屋	名古屋四季劇場
2024 年 7 月 17 日～9 月 23 日	静岡	静岡市民文化会館大ホール
2024 年 11 月 11 日～2025 年 2 月 23 日予定	広島	上野学園ホール

表 1 劇団四季『キャッツ』2024 年 12 月時点までの上演記録

この『キャッツ』初演をきっかけとして、浅利は劇団四季を本格的に商業演劇へ転向させ、俳優が芝居だけで食べていけるという環境を確立させることにも成功したのである。本作は劇団四季全体にとっても、また浅利にとって、一つの劇団を成長させるという経営者としての転機になりえたのである。

2-3 劇団四季版『キャッツ』の内容

劇団四季版『キャッツ』は、本国版とまったく同じストーリー、ミュージカルナンバーで展開される。劇団四季版で登場する猫たちの名前やビジュアルは本国版とは一部異なるが、その顔ぶれは初演以来変更されていない。ビジュアル面や劇中での役割に関する本国版との相違点は次章にて述べるものとする。以下に示すのは、その猫たちの名前である。

グリザベラ

ジェリーロラム＝グリドルボーン

ジェニエニドッツ

ランペルティーザ

ディミータ

ボンバルリーナ
シラバブ⁴³
タントミール
ジェミマ
ヴィクトリア
カッサンドラ
オールドデュトロノミー
アスパラガス＝グロールタイガー／バストファージョーンズ
マンカストラップ
ラム・タム・タガー
ミストフェリーズ
マンゴジェリー
スキンプルシャンクス
コリコパット
ランパスキャット
カーバケッティ
ギルバート
マキャヴィティ
タンブルブルータス⁴⁴

この一覧に準ずると、登場する猫は 27 匹だが、演者は 24 人ということになる。一人複数役を演じる部分は、劇団四季版では先にイコールやスラッシュを用いてまとめている。ここではアンサンブルが一切おらず、全員が何らかの具体的な役名を与えられており、そのキャラクター数も本国版より減少している。これに伴い、本国版に比べて総出演者数も少なくなっており、観客側にとってもキャラクターの判別に混乱を生じにくくなっていると考えられる。

⁴³ Sillabub。「間抜け」を指す「シリー (silly)」と、キリスト教において悪魔を指す「ビールゼバズ (Beelzebub)」を組み合わせて名づけられたとされる。牛乳にぶどう酒やりんご酒を混ぜた同名の飲み物も存在する (池田、2015: 213)。

⁴⁴ マキャヴィティとタンブルブルータスは、1997 年から 1998 年にかけての札幌公演のみ一人二役で演じられていた。

劇団四季版『キャッツ』では、過去に2回の大規模リニューアルが施された。初めてのリニューアルは1998年7月1日に開幕した福岡シティ劇場公演より行われ、舞台装置や衣装、振付、演出も一挙に変更したものであった。2回目となるリニューアルは2018年8月11日に開幕した東京・大井町のキャッツ・シアターでの公演より行われ、ここでは楽曲を中心に一部振付も変更された。

先述の通り『キャッツ』はそもそも海外で上演されていた演目であり、それを輸入して、今日日本で上演されている。作曲者、つまり著作者であるアンドリュー・ロイド＝ウェバーは、『キャッツ』をはじめとする全ての作品の著作権を、ロイド＝ウェバーによって設立されたリアリー・ユースフル・グループ（以下RUG）で管理している。本稿で言及しているリニューアルはRUGの意向に沿って、劇団四季側との協議の上実施されたものである。しかし後述する本国版との差異の一部は現行の公演でも保たれており、RUG側の劇団四季版による演出や表現を理解し、尊重する姿勢のもと成立しているといっていよう。

第3章 劇団四季版『キャッツ』を比較する

3-1 『キャッツ』劇団四季版と本国版の比較

3-1-1 言語と振付の差異

本作の2つの版について、本項ではビジュアル以外にある差異を比較する。1つの作品を異なる国のバージョンから比較するにあたり、第一に検討すべき点は言語である。本国版で用いられる英語では一つの音につきおよそ一単語をつけることができる。しかし日本語では、一つの音に対して一文字から二文字ほどしか当てはめることができず、当然翻訳時にはかなりの制約を強いられることになる。浅利は本国版の台本を翻訳する際に腐心した点について、後に“グリザベラ ―娼婦猫”を例に挙げながらこのように述べている。

当然のことながら歌詞ですからポエジー、詩の雰囲気をもっていますね、詩情を。だからそれを違った形で日本語に移し変えても、ポエジーがね、聞く人にこうポエジーが感じられるようにしなければならない。(中略) グリザベラの歌う曲がありますね。

“Remark the cat who hesitates towards you” っていう曲ですね。それはまあ直訳では「ごらんよ」と来てるんですよ。(中略) そうじゃなくて“re”だから「らりるれろ」、せめて「らりるれろ」の日本語がないかなと思って、散々考えて探すんですけどないんですね。結果30分考えて「ごらんよ」って訳した。“who hesitates towards you”ですね、「ためらいながら あなたに向かって」ってことですけど、そのときに「ふ」がないかな、「ふ」がないな…「は」はあった、「はじらい」っていうのがあるんですよ。そうすると今度“toward you”は「とまどい」って出てきたんですよ。(中略) これ原詞の音に割と近くて、だいたいの雰囲気はとってますね。(浅利 2003)

この証言をもとに、以下に提示している本ナンバーの原詞と日本語訳詞一覧を比較すると、劇団四季版では原詞の頭文字となる子音もしくは母音を、できる限り残して翻訳されていることがわかる。また、原詞では“on her like a grin.”にあたる“微笑みかける”の詞をあえて後の“twists like a crooked pin.”の部分にまわしたり、後半にある“郵便配達人”を“取り囲む人たち”に、“ため息をつく”を“嘲りの目で見ている”に言い換えている。さらにその後の“死んだ方がましだと言わんばかりに”を“まだ生きていたのかい”、“これが美しかった あのグリザベラだと”を“えっグリザベラ あの昔の”と、口語的表現に変えている。このことから浅利による翻訳の特徴として、訳詞では表現を変えてはいるものの、原詞のニ

ュアンスを確かにくみ取っているという点が見られる。他のナンバーでも、言語とあてはめられるメロディーの制約がありながらも、浅利は原詩の意図を確かにくみ取り可能な限り発音を合わせることによってその課題を解決していた。

"Grizabella: The Glamour Cat"／《グリザベラ ―娼婦猫》

(原詞／VHS 版日本語訳字幕／劇団四季版日本語訳詞)

Remark the cat／ごらん あのネコを／ごらんよ

who hesitates towards you／とまどいながら／はじらい とまどい

In the light of the door which opens／開かれたドアの光へ近づく／近づいてゆく

on her like a grin. /作り笑いを浮かべて／このみじめな私を

You see the border of her coat is torn／コートの手はほつれ／引き裂かれたコート

and stained with sand,／シミだらけ／ひきつれたほほ

And you see the corner of her eye／曲がったピンのように／こみあげる涙払いつつ

twists like a crooked pin. /ひねくれた まなざし／微笑みかける

She haunted many a low resort／安い気休めを求めて／盛り場を うろつく

Near the grimy road of Tottenham Court;／盛り場をうろつく／年老いた娼婦

She flitted about the No Man's Land／空き地を ふらふらと／薄汚い 裏街を

From The Rising Sun to The Friend at Hand. /あてもなく さまよう／ふらふらと さ迷って

And the postman sighed, as he scratched his head:／郵便配達人は ため息をつく／取り囲む人たちは

"You'd really have thought she ought to be dead／死んだ方がましだと 言わんばかりに／嘲りの目で見て

And who would ever suppose that THAT／誰が想像できるだろう／まだ生きていたのかい

Was Grizabella, the Glamour Cat!"／これが美しかった あのグリザベラだと／えっグリザベラ あの昔の

Grizabella, the Glamour Cat! /美人ネコ グリザベラ／グリザベラはグラマーキャット

Grizabella, the Glamour Cat! /かつて輝く美貌のネコ／グリザベラはグラマーキャット

Who'd have ever supposed that THAT／誰が想像できるだろう／まさか本当にこの女が

Was Grizabella, the Glamour Cat? /これが美しかった あのグリザベラだと／あのグリザベラだったとは

そしてもう一つの差異として、振付が挙げられる。本国版の振付はジリアン・リン⁴⁵が務めており、バレエの要素がふんだんに盛り込まれ、かつ爪を立てる動きといった猫の野性性が強調されていた。一方、劇団四季版の初演では山田卓⁴⁶が振付を手がけ、こちらは手首を

⁴⁵ イギリスのダンサー、振付家（1926-2018）。本作の他にも『オペラ座の怪人』などの振付を手がけた。

⁴⁶ 日本の振付家（1931-2007）。劇団四季の作品では他に『ジーザス・クライスト＝スーパ

曲げ、指を軽く握りこむ「猫の手」の動きを多用し、猫の愛嬌がアピールされていた。このような振付の改変は、日本の観客にとって馴染み深い猫のイメージを表すことで、人間が一人も登場しない演劇でありながら親しみを感じさせる効果をもたらしていると考えられる。

3-1-2 ビジュアルの差異

本項では劇団四季版と本国版それぞれに登場する猫たちを、初演時のビジュアル面から比較し、劇団四季版『キャッツ』の特徴を紐解いていく。以下表 2 にて、劇団四季版は初演時の画像、本国版は初演時のキャラクターデザインを対象に比較する。なお、本国版のうち Gilbert, Grumbuskin, Tumblebrutus は、いずれも原作にあったグロールタイガーのナンバーのみ登場するため、比較対象からは除外している。

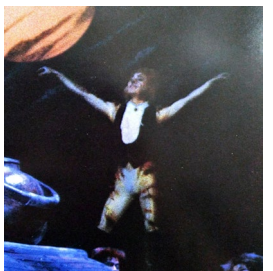
劇団四季版 ^a		本国版 ^b	
グリザベラ		Grizabella	
ジェリーロラム		Jellylorum	
グリドルボーン		Griddlebone	

一スター』『エビータ』など、また宝塚歌劇団の作品や、日本の歌謡曲でも振付を務めた。

ジェニエニドッツ		Jennyanydots	
ランペルティーズ		Rumpelteazer	
ディミータ		Demeter	
ボンバルリーナ		Bombalurina	

シラバブ		Jemima	
タントミール		Cassandra	
ジェミマ		該当なし	
ヴィクトリア		Victoria	
カッサンドラ		Tantomile	

オールドデュトロノミー		Old Deuteronomy	
アスパラガス		Asparagus	
グロールタイガー		Growltiger	
バストファージョンズ		Bustopher Jones	
マンカストラップ		Munkustrap	

ラム・タム・タガー		Rum Tum Tugger	
ミストフェリーズ		Quaxo	
		Mistofffeles	
マンゴジェリー		Mungojerrie	
スキンプルシャンクス		Skimbleshanks	

コリコパット		George	
ランパスキャット		Alonzo	
		Rumpuscat	
カーバケッティ		該当なし	
ギルバート		Carbuckety	

マキャヴィティ ⁴⁷		Macavity	
タンブルブルータス		Coricopat	

表2 『キャッツ』劇団四季版と本国版におけるビジュアル面での比較（筆者作成）

以上によれば、本国版の Tantomile（タントミール）と Coricopat（コリコパット）にあたるキャラクターが、劇団四季版ではカッサンドラとタンブルブルータスに替えられている。また、空中ブランコなどのアクロバットを披露する Carbuckety（カーバケッティ）は、グローバルタイガーのナンバーにおけるシャム猫軍隊長の役も兼ねたギルバートに、そして若い雄猫の George（ジョージ）はコリコパットにあてられている。一方で劇団四季版のカーバケッティは大人の雄猫、ジェミマは若い雌猫という役柄であるが、本国版ではいずれも役割として完全に該当するキャラクターは存在せず、キャラクター性としては独自に作られたものと見られる。さらに、本国版からカッサンドラと入れ替わる形になったタントミールは白をベースカラーとしたやや毛深い姿をしており、本国版の Cassandra（カッサンドラ）のようにスレンダーな印象はなく、他の猫と似たビジュアルであるように見受けられる。その上ランパスキャットは、本国版における Alonzo（アロンゾ）のモノトーンが特徴的な姿とは違い、黄色い毛並みにデザインされていた。

特に違いが目立つキャラクターとして、初めにラム・タム・タガーを挙げる。本国版では黒いコスチュームであるのに対し、劇団四季版では白いコスチュームデザインであった。このデザインはエルビス・プレスリー⁴⁸をイメージしており、ラム・タム・タガーの

⁴⁷ マキャヴィティ役俳優は、マキャヴィティ襲撃のシーンを除いて黄色い雄猫に扮しているが、ここでは除外している。

⁴⁸ アメリカ合衆国の歌手、俳優（1935-1977）。

キャラクター性と関連づけてデザインされたと考えられる。ラム・タム・タガーは劇中で「奔放でセクシーな」キャラクターとして描かれている（劇団四季 2021: 61）。そしてプレスリーはその名を馳せ始めた頃、「激しく腰を振るセクシーな動き」を多分に含んだパフォーマンスを披露していた（大鷹 2022: online）。そのセクシーな魅力に共通しているという点でプレスリーはキャラクター像が近く、かつ日本の観客にとっても親しみやすいとされた故に、劇団四季版『キャッツ』におけるラム・タム・タガーのモデルに取り込まれたと考える。

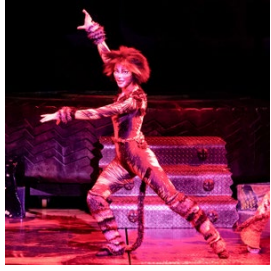
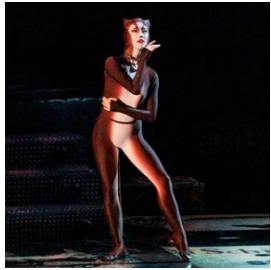
加えて挙げたいのは、劇団四季版のシラバブと本国版の **Jemima**（ジェミマ）である。劇団四季版でもジェミマという雌猫は登場しており、本国版のジェミマともよりビジュアルは近いものとなっている。しかし、作品本編でのキーパーソンとなる娼婦猫・グリザベラに興味を向け、ラストに控えた最大の見せ場であるナンバー「メモリー」でグリザベラと共に歌う、といった劇団四季版でのシラバブと、本国版のジェミマは同じ役割を果たしている（池田 2009: 64-65）。このポジションはグリザベラと対極のような存在であり、ここで挙げた2匹の猫のうち暗い印象があるグリザベラとより対照的なのは、白などの明るい色があしらわれた劇団四季版のシラバブであるといえる。他の猫たちの改変に関してその意図を明確に読解するのは困難であるが、このシラバブの事例からは、劇団四季版『キャッツ』で猫が各々劇中で成す役割をビジュアルによって表現し、観客にとって視覚的に分かりやすいものにしていることが読み取れる。

3-2 劇団四季版『キャッツ』今昔の比較

前章で述べたように、劇団四季版『キャッツ』では過去にリニューアルが行われており、特に初演から1998年までの旧演出版では、現行のバージョンと大きな差がある。本項ではRUGからの指示による演出の変更に触れつつ、その中でも維持されていった劇団四季独自の演出を分析する。以下表3では、劇団四季版での現行版と初演版の画像を対象に比較している。

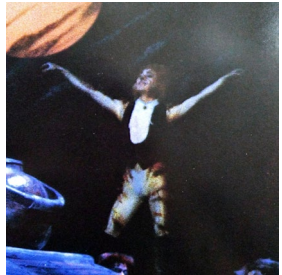
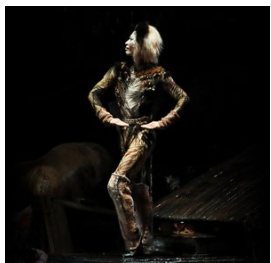
役名	現行版 [○]	初演版
----	------------------	-----

グリザベラ		
ジェリーロラム		
グリドルボーン		
ジェニエニドッツ		
ランベルティーザ		

ディミータ		
ボンバルリーナ		
シラバブ		
タントミール		
ジェミマ		

ヴィクトリア		
カッサンドラ		
オールドデュトロノミー		
アスパラガス		
グローラタイガー		

バストファージョーンズ		
マンカストラップ		
ラム・タム・タガー		
ミストフェリーズ		
マンゴジェリー		

スキンプルジャンクス		
コリコパット		
ランバスキャット		
カーバケッティ		
ギルバート		

マキャヴィティ		
タンブルブルータス		

表3 『キャッツ』劇団四季版における初演時と現在のビジュアル面での比較（筆者作成）

表3によれば、グリザベラやマンカストラップなどのようにあまりデザインが変更されていないキャラクターもいる。しかし前項の表2も参照すると、タントミールなど、本国版のビジュアルに近づけたデザインに変更されたキャラクターも多いことが見てとれる。とりわけ初演時から大きくビジュアルが変わったラム・タム・タガーは、本国版に近い黒と豹柄があしらわれたコスチュームに変更されるにあたって、ミック・ジャガーをイメージしてキャラクター像が作られた（劇団四季 2001: 53）。加えてマンゴジェリーは橙色、ランペルティーザは黄色、コリコパットは麴色、カーバケッティは黄土色がベースとして強調されたデザインになっており、いわゆるメンバーカラーを猫たちに設定し、猫たちをより判別しやすくする効果をもたらししているといえる。リニューアルの際、自身も出演した経験から振付などに携わった加藤敬二は、以下のように変更点を挙げている。

例えば、ラム・タム・タガーはプレイボーイのプレスリーをイメージして白い衣装でした。でも、媚びるプレイボーイではなく、媚びない天邪鬼タイプ。そこに野性味を加えると、世界が変わるでしょう。（中略）タントミールは女性ダンサーの登竜門的存在。ほかの猫よりクールで体のラインでの表現を要求しました。日本版では、衣装もほかの猫と同じようなものになっていたのですが、オリジナルに近いキャラクターに復活したんです。（中略）例えば、「ランパスキャットや、カーバケッティってどういう猫？」と聞くと、だれも明確に答えられなかった。これは、おかしい話です。「カーバケッテ

ィは、ただ一匹のジェントルマン猫なんだよ。だからバシッとタキシードを着た意識で」と話して、「だからこうリードする、手はここに」と振付けると、納得して腹に落として演じることができる。(劇団四季 2001: 53-54)

1998 年のリニューアルでは、初演時にあった猫のイメージを微調整し、あるいはあまり特徴がなかった猫に新たなキャラクター性を与えていた。それによって、制作側や出演者にとっても登場する猫たちの動きなどのイメージがより容易になり、その上明確化されたキャラクター性をビジュアルにも投影させることで、従来の演出を観てきたリピーターや初見の観客にも分かりやすい作品へ変化させたのである。

おわりに

ここまで劇団四季版『キャッツ』のキャラクター表現について、原作からミュージカルが完成するまで、浅利慶太が劇団四季に込めた演劇の理念、過去のリニューアルと上演権の関連、そしてそれを踏まえた本国版や初演版との比較から分析した。浅利は劇団の命運、演劇界の改革にかけた挑戦に、自身が親しんでいた T・S・エリオットの作品が原作であり、日本人にも馴染みのある猫がモチーフである『キャッツ』を選んだ。そのような経緯があったからこそ、浅利は演劇に対して抱いていた「分かりやすいものであるべき」という考えをより強く演出に活かしたと考えられる。言語や文化の差という制約、リニューアルに際しても、それに応じた分かりやすい演劇作りに注力し続け、日本の観客に親しまれる『キャッツ』像を作りあげたといえる。

『キャッツ』の概要でも触れたように、本作は世界初演であるイギリスと日本以外にも世界各国にプロダクションが存在する。今回は本国と日本の劇団四季による公演しか触れることができなかったが、他国の公演でも猫たちのビジュアルやナンバー編成がそれぞれ異なるものもあり、今後の研究にあたり多くの可能性を秘めている。

さらに、『キャッツ』は劇場での公演以外にも、トム・フーパーによって制作され 2019 年に世界公開された実写映画版が存在する。主人公をヴィクトリアに設定したり、映画版のために制作されたナンバーがあったり、舞台版からの変更点も多かった。しかし公開後、元々のミュージカルで見慣れたものとはかけ離れた CG による猫たちの姿等から批判を引き起こし、最低の映画に贈られるラジー賞では 6 部門で受賞する結果となった。自身の作品がこのような事態になったことに対してロイド＝ウェバーも『『キャッツ』は全てが間違っていた。なぜその音楽が鳴るのかということが全く理解されていなかった。あの映画を観て、わたしは『なんてこった』と思った』とまで酷評していた（市川 2021: online）。このように映画版『キャッツ』がミュージカル版と比べて受け入れられなかったその要因についても、今後の研究対象として検討していきたいと考えている。

参考文献

邦語文献

朝日新聞、2007、「山田卓さん死去 『キャッツ』 振り付け」『朝日新聞』2007年11月10日朝刊、朝日新聞社、35。

浅利慶太、1955、「演劇の回復のために」『三田文学』1955年12月号、三田文学会。（再録：梅津 2020。）

安倍寧、2000、『VIVA! 劇団四季ミュージカル』日之出出版。

新井潤美、2021、「エリオット『ポッサムおじさんの猫とつき合う法』とミュージカル『キャッツ』」小川公代・吉村和明編『文学とアダプテーションⅡ』春風社。

池田雅之、2009、『猫たちの舞踏会 エリオットとミュージカル「キャッツ」』角川学芸出版。

伊藤裕章、「劇団四季代表、浅利慶太 劇場に生きる：4」『朝日新聞』（ビジネス戦記）2002年2月23日夕刊、朝日新聞社、4。

井上晴雄、米沢仁次、2014、『劇団四季ミュージカル「キャッツ」のすべて 奇跡のロングランの歴史から舞台裏まで見られる完全ガイドブック』光文社。

梅津齊、2020、『浅利慶太：叛逆と正統：劇団四季をつくった男』日之出出版。

劇団四季、1983、『キャッツ』東京公演プログラム、四季株式会社。

劇団四季、2001、『CATS 5000：そして新世紀へ』四季株式会社。

劇団四季、2021、『キャッツ』東京公演プログラム、四季株式会社。

曾我雅俊、2015、「キャッツと T. S. Eliot」『研究紀要』10、白鳳女子短期大学、241-247。

松崎哲久、2002、『劇団四季と浅利慶太』文藝春秋。

外国語文献

Eliot, Thomas Stearns, 1939, *Old Possum's Book of Practical Cats*, Faber and Faber. (=1995、T.S.エリオット、池田雅之訳『キャッツ：ポッサムおじさんの猫とつき合う法』筑摩書房)

Lloyd Webber, Andrew, 1981, *Cats: the book of the musical*, Faber and Faber, Really Useful Company.

インターネット文献

市川遥、2021、「巨匠アンドリュー・ロイド・ウェバー、映画『キャッツ』の出来にショックを受けて犬を飼う」シネマトゥデイ（2024 年 11 月 5 日取得、

<https://www.cinematoday.jp/news/N0126358>）。

入倉功一、2020、「『キャッツ』が最多ノミネート最低映画賞ラジー候補発表」シネマトゥデイ、（2024 年 11 月 5 日取得、<https://www.cinematoday.jp/news/N0114004>）。

大鷹俊一、2022、「エルヴィス・プレスリーはなぜ偉大なシンガーなのか 映画『エルヴィス』鑑賞前に知っておきたい、“不世出の天才”の歴史」Real Sound（2024 年 11 月 5 日取得、<https://realsound.jp/2022/07/post-1066934.html/amp>）。

劇団四季、「オペラ座の怪人を生んだ匠たち その 2 | 『オペラ座の怪人』作品紹介」劇団四季公式サイト（2024 年 11 月 13 日取得、

https://www.shiki.jp/applause/operaza/learn_more/creator2.html）。

劇団四季、2018、「『キャッツ』東京公演に向けて——さまざまな準備が進行中！ - 最新ニュース - 更新情報」劇団四季公式サイト（2024 年 11 月 3 日取得、

<https://www.shiki.jp/navi/news/s/renewinfo/030555.html>）。

劇団四季、2018、「『キャッツ』東京公演の稽古が進んでいます！ - 最新ニュース - 更新情報」劇団四季公式サイト（2024 年 11 月 3 日取得、

<https://www.shiki.jp/navi/news/s/renewinfo/030882.html>）。

劇団四季、「ミュージカル『キャッツ』作品紹介」劇団四季公式サイト、（2024 年 11 月 2 日取得、<https://www.shiki.jp/applause/cats/>）。

劇団四季、「ミュージカル『キャッツ』の原点に帰る | 『キャッツ』作品紹介」劇団四季公式サイト（2024 年 11 月 2 日取得、

https://www.shiki.jp/applause/cats/learn_more/origin.html）。

関口紘一、2020、「ミュージカル『キャッツ』のミストフェリーズをブロードウェイとウエストエンド、そして日本の 3 カ国で 2000 回以上も踊った、堀内元＝インタビュー」チャコット（2024 年 11 月 2 日取得、[https://www.chacott-](https://www.chacott-jp.com/news/worldreport/tokyo/detail015792.html)

[jp.com/news/worldreport/tokyo/detail015792.html](https://www.chacott-jp.com/news/worldreport/tokyo/detail015792.html)）。

Fandom, *Category:Characters*, 'Cats' Musical Wiki（2024 年 11 月 13 日取得、

<https://catsmusical.fandom.com/wiki/Category:Characters>）

Fandom, *Category:Musical Numbers*, 'Cats' Musical Wiki（2024 年 11 月 13 日取得、

https://catsmusical.fandom.com/wiki/Category:Musical_Numbers)

Really Useful Group, *The Really Useful Group* (2024 年 11 月 13 日取得、

<https://www.reallyuseful.com/>)

映像資料

浅利慶太（出演）、2003、「感動を創る芸術！～ミュージカルの魅力」、『芸術に恋して！』

テレビ東京、2003 年 2 月 14 日。

アンドリュー・ロイド＝ウェバー、1998、『キャッツ』ポリグラム。

図版

a : 劇団四季、1983、『キャッツ』東京公演プログラム、四季株式会社。

b : Fandom, *John Napier* | '*Cats*' Musical Wiki、(2024 年 11 月 2 日取得、

https://catsmusical.fandom.com/wiki/John_Napier)。

c : 劇団四季、「キャラクター | 『キャッツ』 作品紹介」劇団四季公式サイト (2024 年 11

月 3 日取得、<https://www.shiki.jp/applause/cats/character/index.html>)。